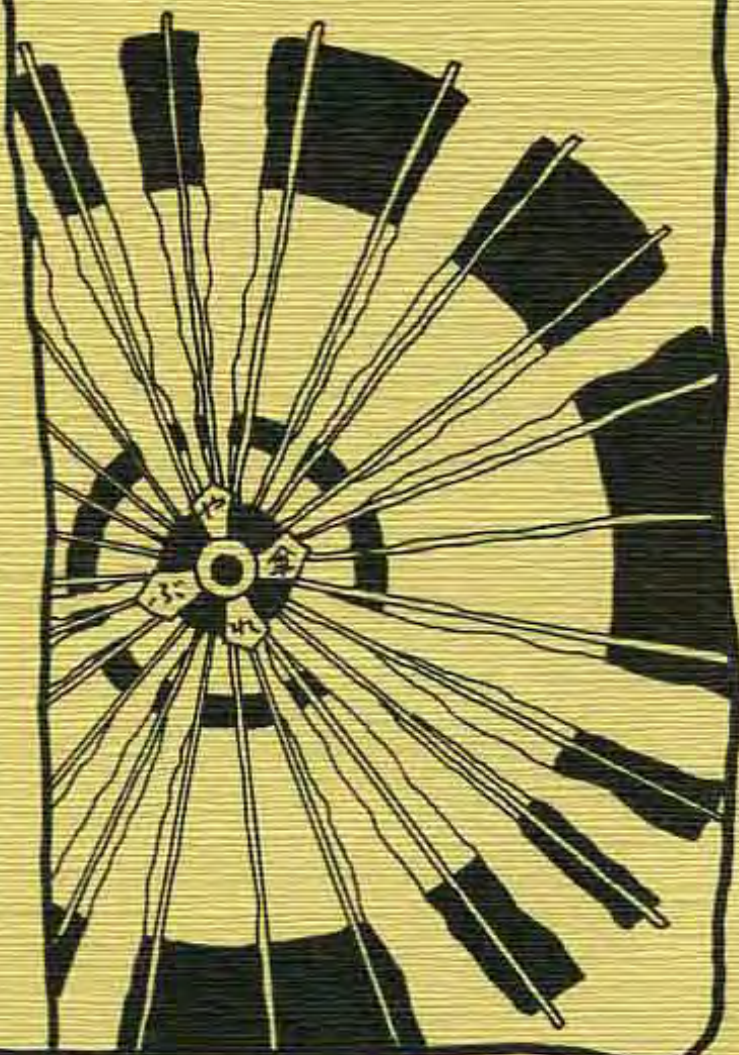


やぶれ傘



九十五号

二〇一七年四月

通らせてもらふ校庭土佐水木 根橋宏次

白梅の辺りに闇の来てゐたる きくちきみえ

県道に出ればコンピニ春めけり 大島英昭

春の海大棧橋の突端の 丑久保勲

川風の届くところに雪柳 廣瀬雅男

桃の花咲いて青空駐車場 渡邊孝彦

踏切があり草あをむ土手の道 瀬島酒望

町中の蕎麦屋の卓の野火埃 青谷小枝

チャイム鳴るもう降り出して春の雨 安藤久美子

ひとしめり来て明け方の暖かき 藤井美晴

朝市の七輪に焼く目刺かな 菊池洋子

見せくれし馬穴の中の蟬蚪の紐 天野美登里

目ん玉はパスタの上のしらすにも 小山陽子

春眠の耳に社の鈴の音 白石正躬

向かひ家は鎖されしままに春落葉 秋山信行

抄 集 句 傘 大 崎 紀 夫 選

春一番胸のつかへを落としけり 久世孝雄

別れ行く日の学び舎に春時雨 有賀昌子

春一番じやんけんほいと子ら弾む 松村光典

雛の顔皆ふくよかに緋毛氈 山本久枝

枝垂れ梅柴犬の背に触れにけり 石塚清文

灯はあれど足跡見えぬ雪の家 石原健二

梅真白史跡の家に住む人も 岩藤礼子

バイエルのピアノの稽古ミモザ咲く 岡田香緒里

土手青む犬は行つたり来たりして 神山市実

紅梅とわかる苔となりにけり 黒澤次郎

葉牡丹を端正に植ゑ逝きにけり 眞田忠雄

指長き仏足石や下萌ゆる 貫井照子

青空に煙ひとすじ山笑ふ 野口希代志

庭隅に夜半に降りたる雪の跡 濱野 新

まんさくのもじやもじや咲けり空のあを 森 美佐子

たんぽぽ

大崎 紀夫

春の日のきらりきらりと蛇口の背
茨線と杭と真昼のたんぽぽと
盆梅のかをりは廊下曲るまで
目刺し焼くガスの火絞りまた絞り
積みれたる丸太を蝶の越えにけり

盆地より風抜けてゆく牡丹の芽
春の昼倉庫の軒の下に猫
春昼の郵便受けにチラシのみ
沼尻のあたり菜の花まつ盛り
はくれんの空なり暮るる頃となり
坂道をかからすおりゆく春隣
土手に雉みて川上へ風少し

土佐水木

根橋宏次

冬たんぽぽ乗馬クラブの柵ひかり
まんさくのあたりでバスを降りにけり
コーヒーの出てゐる卓のヒヤシンス
石段の下にミモザの咲く茶房
畦焼の煙をもろにくらひけり
北窓を開きイーゼル立てにけり
風船の入りゆく漫画博物館
雪形のくづれてゐたる花ゆすら
舷を叩いて散らす春の雑魚
通らせてもらふ校庭土佐水木

白梅

きくちきみえ

白梅の辺りに闇の来てゐたる
箸立てに箸匙フオーク寒明くる
豆まきの豆は襖に弾かるる
暮れやうとする商店街にゐて二月
木漏れ日のなかに春の日のひとつ
薄氷の融ける寒さのありにけり
三叉路に空き地空き地に花辛夷
春の草抜く大方は根の重さ
雨粒は繁縷の花に落ちにけり
梅の香の寺ぬけ魚買ひにゆく

ミモザ咲く

大島英昭

枯れ園に水道栓とゴムホース
春近し櫟の幹に日があたり
土ぼこり立てて雌雉子がつつ走る
春浅き畑にドラム缶錆びて
切り岸の上を人ゆく蝌蚪の紐
自転車を置いて蓬を摘んでゐる
県道に出ればコンビニ春めけり
引つ越しのトラックミモザ咲く家に
積みまれたる丸太新し山笑ふ
紙くづがひとつ光つて土手あをむ

団子屋

丑久保勲

専用車でピアノを運ぶ春隣
白梅は阿像の上に枝広げ
卍像は紅梅の香に包まれて
二月堂へ続く坂道梅の花
盆梅や電話ルームのあるカフェ
画材店のビーマス像に春日差す
春の海大栈橋の突端の
エレベーターはすべて上へと春一番
モンブランを買っておまけの紙雛
団子屋の甕に活けられ桃の花。

雪柳

廣瀬雅男

朝の月冬の富士へと沈みけり
春めくや子等は砂場に山つくる
星ひとつ見ゆる夜空や猫の恋
石段の先も石段梅の花
下萌えや杭ひとつ立つ砦跡
まんさくや経の聞こゆる昼の寺
春なかば開け放たれし艇庫かな
莖立ちや土手を斜めに登る人
ペランダの素焼きの鉢に黄水仙
川風の届くところに雪柳

桃の花

渡邊孝彦

桜木の瘤の小枝に冬芽かな
カーカバー風に膨れて仏の座
トラツクに土載せてくる春隣
ルージュだけのマネキンの顔寒明ける
余寒なほ高架の駅で電車まつ
高台の芽吹く木立でかくれんぼ
鳥の巢の藁が木の根にこぼれをり
石段の下の水辺の水温む
雨しづく芽立ちの枝にふくれけり
桃の花咲いて青空駐車場

土手の道

瀬島洒望

笛鳴きや都幾川沿ひに館跡
春近き養鶏場に卵買ふ
クルトンの浮かぶポターージュ春うらら
馬酔木咲く庚申様を祀る坂
梅日和溜り醬油の焼き団子
踏切があり草あをむ土手の道
豚小屋の窓開いてゐる春の昼
旧道に入りて行き遇ふ農具市
うららかや木つ端の浮かぶ舟だまり
轉りの庭に野点の準備中

野火埃

青谷小枝

縁側に猫がねてゐる枇杷の花
参道に昨夜のつひなの豆あちこち
町中の蕎麦屋の卓の野火埃
母の家に母を思へば春の雪
春風や衿に小花のピンバツジ
春や春水占の字の浮かぶまで
芽柳や古地図のままに堀曲り
本棚の一番下の春の闇
会席の最後小ぶりのさくらもち
花きぶし雨たたへつつこぼしつつ

春の雨

安藤久美子

啓蟄の日のトーストの狐色
チャイム鳴るもう降り出して春の雨
霾ぐもりコントラバスのケース行く
鉄棒に触れて卒園リボンの子
スキップは蒲公英の花踏まぬやう
大皿の料理に加へ花菜漬
コンパクトミラーに映る春の雲
階段を降りれば水辺木の芽風
蝶の来て空の高みへまたたくま
買ふまへに指で回して風車

春 寒

藤井美晴

冬晴れのビルの天辺烏ゐる
城ヶ島大根売りに雨が降る
料峭の窓を開けば海のこゑ
ボイラーにボンと火がつく寒の明け
春寒の無聊を又の「藪の中」
ひとしめり来て明け方の暖かき
きさらぎの青空を航くプロペラ機
塩味のいささか強き目刺し食ふ
春日濃し殊に頭の天辺に
青空の辛夷の花がくづれけり